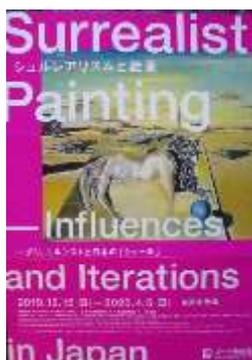


シュルレアリスムと絵画

—ダリ、エルンストと日本の「シュール」

ポーラ美術館（箱根・仙石原） 2019. 12. 15～2020. 04. 05



「シュルレアリスム」(Surrealist) は、1924年にフランスの詩人「アンドレ・ブルトン」が中心となって推しすすめたもので、20世紀において最も大きな影響を及ぼした芸術運動である。彼らは理性を中心とする近代的な考えを批判し、精神分析学の影響を受けて無意識の世界を探求することで、ヨーロッパの絵画や文学において“夢や空想のような世界観の作品”を数多く生み出したもので、日本では「超現術主義」と訳されている芸術の潮流である。

サルバドール・ダリ 《姿の燃えない眠る人、馬。獅子》 1930年 上図

棚引く雲が夕焼けに染まり始めるなか、荒涼とした風景の中央には横たわる裸婦・馬・獅子のイメージが重ねられていて、遠近法が強調された画面の奥には、煙突や長い影を落とす彫像が描かれている。一つの図像から複数のイメージを浮かび上がらせる手法「二重像：ダブルイメージ」を考えた作品である。

ルネ・マグリット 《ゴルコンダ》 1953年 油彩/カンヴァス



黒い外套と山高帽を被った同じスタイルの男性が、ほぼ一定の間隔で数多く「浮遊」して描かれ、遠くから見ると山高帽の大雨傘が落下しているように見え、「浮遊」と「落下」を同時に表現している。

またこの二つは、画伯の憂鬱な感情とは全く真逆で「目立ちたいと思われない喜び」と「浮遊」の少し矛盾した感情を一つの作品として表現している。

<その他の主な出展作品>



エルンスト 《貝の花》



福沢一朗 《寡婦と誘惑》



古賀春江 《白い貝殻》